

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The potentiality of the human body' s doings  
-Toward a new era of peace for human being-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三井, 悦子, MII, Etsuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2011">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2011</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 「じか」「からだ」そして「にんげん」について ―竹内敏晴の思想と実践にふれて―

三井 悦子

はじめに

グローバル化社会を乗り越えて、いま世界は次なる時代へと動き始めている、と思いたい。しかし、今もなお世界のグローバル化は進み、我が国においては、「グローバル人材の創出」などという美辞によって、非人間的なまでの人格を養成しようとしているのが現状である。

グローバル化社会は、効率・生産性を重視し、経済最優先つまりお金が儲かるシステムをこれでもかというほど推進してきた。「お金儲け」という単一の目的が世界中を席卷し、競争して成果を上げること、それが人間にとってより豊かな暮らしにつながるものだと思われてきた。そして、その目的を達成するために、もともとはまったく異なる風土に住み、異なる言語や文化や生活習慣をもつ多様な人間を同質化することをためらわなかった。すべてを均一化し標準化する価値観が正当化され、そしてそれにそぐわないものはふるい落とされることになった。たとえば、世界標準となった英語圏の情報が、「偏っている」とは意識されずに、これのみがすべて「真実」であるかのように見なされ、そして押しつけられてしまうこともそのよい例であろう。

しかしながら、そこに生きる人間は全く異なる文化、歴史の中にいる。異なる社会を見るには画一的・単眼的なもの見方では不十分である。グローバル化社会へ急速に傾斜するなかで、何よりも経済を優先し、そこに生きる人間の生活を置き去りにしてきた人間の（欲望の）問題、置き去りにされた人間の問題がようやく浮き彫りにされつつある。今ここで、ポスト・グローバル化社会にむけて、グローバル化社会が切り捨ててきたもの、また、グローバル化への推進によって失ってきたものをあぶり出す必要がある。そうすることによって次の時代を、人間が人間らしく生きることのできる社会へとデザインする足がかりとなるだろう。

さて、本稿が取り上げるのは、「からだ」である。人間の身体。いやもつというならば、生きものとしての人間の身体についてである。いま、人間の身体は操作され、さらには経済の対象ともされている。つまり売りが買いがなされるということである。人工授精、遺伝子操作、着床前スクリーニング、出生前診断、臓器移植、安楽死、はたまた生殖ビジネス。人間の身体を科学技術の対象とし、どこまでも人間の手を加え「改良」していくこうとする動きは止まらない。「効率よく生

産でき、弱点を持たない（高性能の機械のような）人間」を創り出すことへの欲望はますます高まるばかりである。いま私たちはこうした危機的状况におかれているといえるだろう。<sup>(1)</sup>

本稿では、こうした人間の危機的状况を直視し、その状況に抗するために何が必要なのかについて、「からだ」ということに着目して考えてみたい。それは、ポスト・グローバル化社会にとって「身体」に何ができるか、という問いかけでもある。

### 1. 「からだ」ということ

ポスト・グローバル化社会にとって「身体」に何ができるか。ここでいう「身体」、ここで求める「身体」とは、先にも書いた通り、「生きものとしての人間の身体」すなわち、ここにこうして生きているこのからだ、を指す。身体測定や身体検査のように、目で見て、触れて確認し、メジャーや重量計で計測して数量化されるような「身体」ではない。このように数値で表すことのできる身体は、本稿においては問題としない。そうした身体について論じることはここでは意味をなさない。

私たちは、いのちとして生まれた。そのときにあったのは、柔らかで温かい「からだ」である。そしてやがて死を迎え、冷たく硬くなる。私たち人間はそういう生きもの、身体的な存在である。

### (1) 「からだ」は「からっぽ」

「身体」や「肉体」という言葉は、body, Leib, Körper, corpsなどの外国語の翻訳語として近代以降に造られたものである。一方、「からだ」という言葉は古来より我が国にある。

そして今もなお、私たちの日常では言い慣わされた言葉である。本や映像で人間の骨格標本や筋肉図をみたとき、それを私たちは「人体」と言うだろう。また、体重や胸囲、座高を測定することを「身体」測定と呼ぶ。他方、「今日はからだの具合が良くない」とか、「やる気はあるのだがからだがついてこない」など、このような場合には私たちは「からだ」と言うのであり、身体の調子がどうか、肉体が動かない：などとは言わない。このように、「からだ」という言葉は、生きている「この身」をまことによく示すものである。私たちは、「生きているこのからだ」は、本に示されているような、内臓が特定の場所に固定され静止しているような「モノ」ではない、と承知しており、無意識のうちに言葉を区別して用いているのである。

さて、その「からだ」について考えるにあたって、まずその字義にふれておこう。

「からだ」という和語は、「から」から来ているという。字訓によれば、「(から)は外皮・外殻を意味するもので、草木の幹茎、ものの根幹をなすもの、：人には「からだ」という」とある。ということは、「からだ」と言うとき、それは中空のあるもの、そしてその外側を示すものだということがある。

この字義をさらに肉付けして、野口体操の創始者である野

口三千三（一九一四〜一九九八）は「からだ」をつぎのように説明する。「から」は、空、虚、洞、穀、殻…でもある。それは懐かしく安らかな安息の場であると同時に、或る神秘的・呪術的な働きによって、はかりしれない怪しい何事かが起こることを予想させる。「内部空間」を持つ…<sup>2)</sup>野口は、「からだ」というのはもともと「からっぽ」であり、「からっぽ」であるからこそ、その空洞の中に何かが生まれてくるのだ、と考えているといえるだろう。

植物の外殻・外皮はその内側に大切なものを抱き、守り、育むところである。そして「からだ」はまさしくそれと同じ働きをすると考えられる。硬い外皮に包まれた種からやがて芽が出て伸びていくように、人間の「からだ」もまた何かを生み出すエネルギーあふれる流動的な場だということができらるだろう。

## (2) からだは不可思議なもの

私たち人間は、このような「からだ」として生まれ、そして生きていくのであるが、さて、自分の「からだ」のことをどれくらい知っていると見えるだろうか。あなたは自分の「からだ」について何を知っていますかと問われれば、身長、体重、視力、聴力などをあげて答える人がいるだろう。どんな力を持っていますかと問われれば、握力や背筋力や柔軟性をキログラムやセンチメートルと数字を用いて説明するかもしれない。さらには、顕微鏡やCTやMRIなどの精密機器を用いて、ふつうなら見えない部分を見た検査結果を答えるかもしれない。しかし、これらは先ほども述べたように、

観察し、検査し、数値化される「身体」についての情報である。こうした数値や像を目の前に示され、「これがあなたの身体（カラダ）ですよ」と言われると、私たちは疑わずになり納得し、従順に受け入れてしまいがちである。それは、数字が絶対的な真実だと無意識のうちに思い込んでいるからであるが、はたして、生きて動いているわたしの「からだ」は、本当にそこに示されたものなのか。いや、そうではないはずである。「からだ」は流動し、刻一刻変化している。

であるならば、数値とか標準とか科学とか、そういう外のものさしをあてるのではなく、生きて動いて瞬間瞬間に変化するからだからのメッセージを感じとること、からだの声を聞くこと、それがからだを知ることになるだろう。「からだ」は静止したモノではないのだから。

つまり、からだを知るためには、知識を獲得し積み上げていくという方法ではなく、つぎつぎと起ってくる変化の波にのりながら、からだのなかに何が生まれ何が流れていくのか、ただただ感じたままを受け取り、何かに気づき、動くこと、そしてからだの不思議に驚き、その不思議さを十分に味わうこと、これらがからだを知ることであろう。

「からだ」には不思議なことが多い。「不思議」というのは「不可思議」、つまり、あれこれ考えをめぐらすこと（思議）ができない（不可）くらいだということである。自分の意思とは無関係に、あれこれ勝手に感じ、勝手に動き、あるいは動こうとしても動かず、また、自分の思いや予想を反する行動を起こす。このようにコントロールを超えたからだの存在、その不可思議に気づいたならば、からだを知るとい

ことの第一歩を踏み出した、ということである。

つぎに「からっぽ」になること、「からっぽ」であることについて考えてみよう。

私たちは、ふだんは、たいてい「からっぽ」とはほど遠い状態で生活している。無意識のうちに身体が身構え、緊張している。社会生活において人はいろいろな役割を担い、仕事を持つ人はその職業人としての「看板」を無意識のうちに自分に背負わせている。自分への期待や理想が自分に覆いかぶさる。相手からの期待にこたえようとか良く思われたい、そのための気づかいや計らいもある……。こうした何かへの「こだわり」は身体に刻まれ「こわばり」となって固定化する。それが姿勢や表情になって表れ出る。胸を張りすぎて腰をそらせている人、反対に腰が引けている人、いつも腕組みをしている人、そして、いつもニコニコ笑顔でいる人；等々。

こうした、からだに組み込まれたこわばりをゆるめ身構えをほどこき、習慣化した姿勢や癖に気づいてそれをとかし、肩書きや役割という看板を下ろさなければ、「からっぽ」にはなれない。演出家竹内敏晴（一九二五〜二〇〇九）は、これらをソクラテスの言を借りて、「身体のドクサの吟味」と呼ぶ。<sup>(3)</sup>彼のレッスンは、身体のドクサを、身体の動きによって解きほぐし、あるいはめぐり、剥がしていく。レッスンのはじめに行われる「ゆらし」は、無意識の緊張に気づく一歩となっている。そして、さまざまなレッスンを通して、これが自分だと思っている状態（それは過去の自意識であり、思い込みである）にこだわるのではなく、それを手放し、そ

の時その時に湧き上がってくる感覚を大切に味わいながら、しかしそれにいつまでも拘泥することなく、またつぎつぎに捨てていく。その繰り返しをとおして、しだいに「からっぽ」になっていくのである。

次節で述べようとする「じか」は、「からっぽ」であることに深く関係している。

## 2. 「じか」ということ

ここまで述べてきた筆者の「からだ」ということに関する問題意識は、竹内敏晴の思想と実践に大いに影響を受けている。竹内は、前出の野口三千三と歩みをもにしていた時代があったが、やがて袂を分かつことになったという。それは、二人の関心が同じく「からだ」に置かれながらも、竹内は、より人間と人間の関係性の方へと進んでいったことによるらしい。そして、その人間への根源的な問い、そして人間と人間の関係性の追究における重要なキーが「じか」ということであった。

竹内は、数多くの著作の中に、「じか」であること、という項を幾度も立ててきた。そして最晩年の著『「出会う」ということ』の第I部第一章のタイトルに「へじか」であること<sup>(4)</sup>をおいた。

この、「へじか」であること、「出会う」ということ、が、竹内の思想と実践のもっとも重要なキーであることは間違いない。彼は、そのあとがきに、：加筆や修正をしたこともあるのだが、と言い、「しかし今私は病床にあり、それをすることができない：二〇〇九年九月五日 竹内敏晴」と、

いったんペンを置く。そして、その二日後九月七日の夜明け前、息を引きとった。彼の死から五年目、『セレクション・竹内敏晴の「からだと思想」』（全4巻）が出版された。その第4巻のタイトルは「「じか」の思想」であり、この最終巻の最終章に「「じか」であること」がおかれている。<sup>6)</sup>

さて、話は少しされるが、筆者はある時期、欠乏感のようなものに悩まされることがあった。胸に迫ってくる熱い想いやハラにすんと落ちる納得感がない。何か違う、生きている実感が無い、と。何かぼんやりしたままで、自分の存在さえあまいになってきてしまう。これでほんとうに生きていくといえるのか、「わたし」はいつたどこに居るのか、と存在不安に陥っていたようだ。

その後、何年かを経て、竹内レックスに参加したり、竹内氏を囲む研究会などで話を聞くうちに、あの時の感覚は、「じか」ということに関係しているのではないか、「じか」ではないということがあの欠乏感や不安感につながっていたのではないかと気づいた。そうだ、わたしは「じか」でいたい、と思っていたのである。にもかかわらず実際には「じか」とは程遠いところにいたので、生きてる実感が無い、という言葉が出たのだろう。このように「じか」ということは、「リアル」とか「ほんとう」とか「なま」という感覚に似ている。竹内は次のように問いかける。

「社会Ⅱ世間の言語は、人と人のかかわりでさえも情報の交換の範囲に押しこめる。相手に対して礼儀正しく修飾し偽装する「ウソ」のことばである。社会人はどうやってこれを

捨てて、なまで『じか』な世界に入ることができのだろうか。」<sup>6)</sup> 私たちは普段の生活で、誰かとなにかを話しているが、じつは交わしているのは「言葉」ではなく「信号」にすぎないのではないか。ただ情報を伝達しているだけなのではないか。たとえ丁寧な言葉づかいであったとしても、それは人間の「まことのことば」とは言えないのではないか。それは上手に偽装した「ウソ」のことばである、と。

人は、社会の中で生き、そこで他者とさまざまな関係を取り結ぶ。そこには人間的な交流も人間的とはいえない「ウソ」のやりとりもあるだろう。「人間的な交流」は「偽装するウソのことば」によつては生まれえない。何かをあいだに介したり、繕ったり、飾ったりしているうちに、それは「ウソ」になっていく。マイクロフォンを介した音声は、もう私の言葉ではない。そこから流れ出ているのは情報である。「じか」でないとは、そういうことである。私は、私の声を、私のことばを届けたい。私を受け取ってほしい。「じか」というのはそういうことではないだろうか。

なんとかして「飾り」や「ウソ」を捨てて、なまで「じか」な世界へと入りたいものである。ではそれは、どのようにしたら可能なのだろうか。

ここで、前節で取り上げた「身体のドクサの吟味」を思い出してみよう。「からっぽ」になること、そのためにさまざまに余分なものを手放し、捨てていくことが大切であった。「じか」であろうとすると、同様に吟味が行われる。人間とはどのような存在か、そして、人間が人間として生きるとはどういうことか、それには何が必要で何が余計か、を吟味

していくのである。

これについては、次節で竹内レッスンの中で行われる「呼びかけのレッスン」と「出会いのレッスン」を取り上げることにするが、その前にまず、「じか」という言葉について触れておきたい。

「じか」は、「直（じき）」から派生した言葉であり、正直であること、間に何もおかないこと、間に隔たりがないこと、直接的であることを意味している。「直（じき）」には、ふたつの間に、ものや人を入れずに行うこと、時を移さずすること、距離の近いこと、心がすなおなことという意味がある。

したがって、「じか」ということを「個（自）」についていえば「構えない、ありのままの自分でいること」といえるだろうか。また、正直であるとか、素直であるという性格や心情を表わすともいえるだろう。と同時に、人と人の関係性をいうときの「じか」は、正直な、素のままの個と個が、余計なものを介さずにふれあい、つながり、まっすぐに受けとめあうことだといえようか。

このように、「じか」は、個の問題と関係性の問題のふたつのことから含んでいる。すなわち、「わたしであろうとすること」と「他との関係のなかにあること」の双方が「じか」には含まれるということである。さらに、こうもいえるだろうか。「じか」であるためには、その始まりにおいてすでに、「他者」が存在する。「他者」との交流や交感（ふれあい）を前提としているのである。と。人間が個として生きることは他とのつながりの中で生きることは不可分である。そして自の存在にとって、他の存在が根源的に必要だということ

とである。さらに言うならば、「私」は、自分（個）のなかに存在するのではなく、他との「関係性」の中に存在する。人間は、文字通り、人と人との間、「自」と「他」との関係性において存在するのである。<sup>6)</sup>

ところで、竹内氏を囲む研究会で、「じか」ということが話題になることがよくあった。<sup>8)</sup> あれこれ例を挙げながら、例えばスポーツの状況ではゾーンと呼ばれる状況にあるときや、これまでできなかった技ができるようになった瞬間や、無意識のうちにある動作や行為をしていたときなど、スポーツにおけるエクスタイズもまた、「じか」ということではないか、などの意見を交わした。その後しばらくして、竹内から次のようなメッセージが届いた。

……簡明にいけない「じか」とは体験であって、思想ではなく、また、ある境地でもないということ。だから出来事として語ることはできるが、常在することとして言葉で説明することはできない。また、ひとりで訓練して到達することもできない。他者と出あう一瞬に現れる現実に過ぎない。<sup>9)</sup>

竹内にとって、「じか」は、「個」の問題というよりもむしろ、関係性の、そして場の問題となっている。「じか」とは、人間と人間が向かい合うその深い集中の中で生まれてくるある状況、一瞬のうちに消え去るもの、だからこそその体験は印象深くまた尊く、からだの記憶に残るのである。

### 3. 「じか」へのアプローチ — 実践記録から

ここに示すのは、「竹内レッスン」に学んだ筆者と大学生

女子との実践記録である。期間は四日間で、初日には竹内の『からだ』とことばのレッスン』を輪読し、残りの三日間は実践的な学修を行った。内容は、ヨーガによるからだへの集中、四つん這い、ゆらし、抱きとめなどによる緊張への気づき、相手との委ねあい、「詩を読む」を経て「呼びかけ」へ、「並ぶ」を経て「出会い」を行った。つまり前半には、からだへの気づきを深め、生きものとしてのからだを取り戻し、からだをからっぽにする、というようならだへのアプローチに時間をかけた。そして、四日目の午前「呼びかけのレッスン」を、そして午後「出会いのレッスン」を行った。

次に示すのは、この最終日の二つのレッスンの様子と、その後書かれた学生の「ふりかえり」の記録の抜粋である。

#### (1) 呼びかけのレッスン

五人が間隔をあけて座る。目を閉じる。その背中側四〇五メートルほど離れたところに別の一人が立つ。座っている者のなかのどれか一人に向かって、「一緒に行きましょう」とか「こつちに来て」などの簡単なことばで呼びかける。「呼びかけられた」「わたしだっ」と思った人は、手を上げる、あるいは、その呼びかけに応じる。他の参加者は、彼らを遠巻きに囲むように座って、呼びかける人が誰に向かって呼びかけたか、どのように呼びかけたか（姿勢や動きなど）をよく見ている。順番に、全員がこの「呼びかける人」になる。そのかん、呼びかけられる側の五ヶ所には、だれがどこに座ってもいい、自由に入れ替わり座っていく。

一人目 Aさんの呼びかけ

「暑いですね〜」

場は、しーんとしている。誰も手を上げない。そして、くすくすと笑い声。

たしかに暑いのは暑いけれど、暑いですね〜と言われても、こたえようがないね〜、言葉を変えてみようか、と私。

「こんにちは！」

しーん。誰も手を上げない。そこで、座っている人に尋ねてみる。あなたが呼びかけられたではありませんか？ うーん、と首をかしげている。では、そのお隣のあなたではありませんか？ そうかもしれない…：ような気もするけれど…、とあいまいな答え。順番に、全員に尋ねていく。そうすると、私の方には来なかったと思います、と方向を示す答えが出てきたりする。じゃあ、見ている皆さんに聞いてみましょう。Aさんは誰に向かって呼びかけていたでしょうか。彼らは目を開けて呼びかけ手が呼びかける一部始終を見ているわけなので、はっきりとわかっている、と思いきや、全員が同じ人を指し示すことはなく、二〜三に意見が分かれる。あれれ、不思議ですね。Aさんの声はどこへ行っただでしょうか。ではもう一回やってみましょうか。

「こんにちは！」

呼びかけられる方に座っている人のうち、二人がおずおずと後ろを振り向きながら首をかしげて苦笑い（照れ笑いか？）している。どうやら手をあげるほどの確証はないようだ。その一人Bさんに、あなた、呼びかけられたと思った？



と尋ねると、呼びかけ手をチラチラみながら、「うーむ、たぶん」。で、あなたも呼びかけられたと思ったの？と振り向いたもう一人のCさんに尋ねてみると、「でも、Bさんがそうなんだったら、私じゃないかな？」いやいや、そういうことではなくて、あなた自身の感覚はどうだったの？他の人のことは考えなくていいんです。そして、Aさんに、ところで、あなたは誰にこんなことは言って言ったの？と聞くと、「Dさん」と言う。BさんでもCさんでもなかった。Dさん、あなたも呼びかけられた感じはしなかった？ 「はい、ゼーンゼン」。

一人目の呼びかけはこのような感じで、呼びかける方も、呼びかけられる方も、見ている方も、いったい何がおこっているんだ？と、あつげにとられていようすである。

これが二人目、三人目となると、徐々に集中が深まっていく。呼びかけられる人たちに聞いてみると、「わたしではなく、もっと前の方だと思う」とか、「横を通って行った」とか「どこかはわからないけれど、私のところではぜったいがない」など、声を通っていくことがわかり始める。さらには、「私の方向に来たけれど、ちよつと手前でことばが落ちた」「ばあーとどこかへ飛んで行った」などの意見が聞かれるようになる。

四人目。「こっちに来て」の呼びかけに対して、「たぶん私です」と手を挙げたのだが、あまりうれしそうではないので、どうしたんですか、と尋ねると、「来てとは言われた、それが私だとは分かったのだけれど、なんか変な感じ。行きたいとは思わない」という。声が届くことと人を動かすこととは

異なるのだということに一同が気づく。こちらが発した声は相手に届かなければただの音声に過ぎない。こちらの声がまっすぐ相手に届き、その人のからだの中に入って、「ことば」に変わる。そして相手を変える、動かす。呼びかけるとは、ただ声が届くというだけではなく、その先に、相手を動かすということが含まれる。他者をこちらの世界に迎え入れるためには、相手の世界にはいっていかなければならぬ、こちらのこだわりや思いをからっぽにして、相手に呼びかけなければ声は届かないのである。

途中休憩をはさんで、二〇名全員が呼びかけ手になる。各々からだを緩めて、再開。息を入れて、止めて、吐いてーと、みんなで一様に息を抜いて、息を合わせて、後半に入る。

(…中略)

たった一人の人に、しかも背中から(視線を合わせず、顔を見ないで)呼びかけるといふ初めての体験に、学生たちはどのような感想を持っただろうか。彼女たちの「ふりかえり」を見てみよう。

- ・「呼びかけ」は難しい。声が空間で迷い、方向を見失うということに驚く
- ・こんなにも声が届かないとは…がっかり
- ・言葉が届いたとき本当にうれしかったし、気持ちよかった声を出すことがあんなにもすごいと思っただけは初めてだ
- ・意思の疎通の難しさと素晴らしさがとても印象的だった
- ・自分では投げかけているつもりなのに、その人は気づいてくれない。顔を見ないで呼びかけるのはとても難しい
- ・「呼びかけ」の二回目で、相手から返事をしてもらった時、

アーこれが届くということか、声が相手に届いて「言葉」になった瞬間か、と実感した。音が意味を持つことの面白さを感じた。

・言葉をはっきりと、伝えたい人をしっかりと見つめて、力を抜くことが大切だと思った

・ことばを伝えよう、声を届けようとする、自然にからだは動いていた

・あの時、わたしのかけた「おつかれさまです」に対して返ってきた「ありがとう」を私は忘れない

・全員に向けて発する声と、一人の人に向けて呼びかけることの違いがわかった …… (以下、割愛)

#### 〈聞く側の体験〉

・はじめはよくわからなかったが、何度も繰り返して聞いていくうちに、声を通っていく感じがわかるようになった

・集中力がとても必要で、一人が終わるとどっと疲れた

・私の背中にびたっと声が届いたとき、うれしかった

・音が落ちたり突き抜けたり、当たったと思えばもつと前に行ってしまったたり、不思議な感覚だったが、よくわかった

・こんなことが目に見えるようにわかることが不思議

・人の声が背中にあたる感じ、自分の横を通っていく感じ、後ろで落ちる感じがわかった …… (以下、割愛)

右に「あの時、わたしのかけた（おつかれさまです）に対して返ってきた（ありがとう）を私は忘れない」とあった。呼びかけた彼女が、相手からの「ありがとう」に胸を打たれ

大切な宝物として受けとることになったその「呼びかけ」はどのようなものだっただろうか。できるだけ忠実に再現してみたい。

「おつかれさまです！」と呼びかける。からだはまっすぐに相手の方を向き、からだ全体が相手の背中に向かって出ていくようにやや前傾している。すぐさま、「ありがとう」と一人が振り向いて立ち上がり、呼びかけた人に近づいてきた、もう片手をさし出している。そして握手。「おつかれさまです」がまっすぐに届いた。呼びかけられた人は、「はい私です」とただ手をあげるのではなく、ぱつと振り向いて「ありがとう」と声を出して応答し、立ち上がって歩み寄り、手をさし出したのである。そして、呼びかけ手は差し出されたその手をうれしそうに両手で包み込んだ。

この例は、呼びかけのレッスンのさらに深いところへと分け入ったといえるだろう。つまり声はどのようにしたら届くのか、届かないのは何が原因なのかを吟味していくことを超えて、「共にいること」の体験となっている。「おつかれさまです」という呼びかけに、「あ、おつかれさまっ」とおうむ返しに返事をしたのではない。まーそんなふうにならなくて、疲れて、ありがとう、うれしいわ。で、あなたはどうか？ 疲れてない？ そんな言外のやりとりとつながりが二人の間には生まれている。おうむ返しの反応ではなく、響きあったのである。

声が届く、響きあう、動かし動かされる、そして手と手がかさねる。私が手をさし出すことは、私があるを私の世界

に招き入れることである。あなたがそれに応えて手を出してくれる。それは、あなたが私をみとめ、受け入れてくれたということ。私があなたを招き入れようとするとき、招き入れるためには、あなたに受け入れられなくてはならない。この互酬、そして「共にいる」こと、人を人として生きさせるのは、こうした安らぎや歓びなのではないだろうか。

場はこのような深い集中に入り、いよいよ最後の「出会いのレッスン」へと進む。

## (2) 出会いのレッスン

広いフロアーを使って、何も置かれていない四角い空間を準備する。その端と端に二人が背を向けて立つ。それ以外の参加者は四角い空間の外側で見ている。「どうぞ」の合図で、二人は振り向き、歩き出す。相手と二人っきりの世界で、手にどのように近づき、どのようにかわるか、そのときどのような動きがうまれるのか、あるいは、どのようにもならないのか、そしてどのように終わるのか。二人一組になって実際に体験する。そして、終わったあとで、二人は何を体験したかを回想し、それを言葉にしてみる。

見る人は二人の集中とその場を支えて、そこで起こることを、自分の身になって感じる。決して批評的な目で見ないようにする。そして、意見や感想を求められたら、見たことを語る。解釈を語らないことが約束事である。

竹内のレッスンでは、ひと組ひと組、丁寧に濃厚なアドヴァイスや意見交換、試行錯誤がなされる。たとえば、どんな動きがあったか、どんな姿勢だったか、などを示したり、相

手を変えて同じことをやってみるなどである。午後1時から開始した出会いのレッスンが延々続き、夕食をはさんで、夜おそくまで続くこともある。それでもなお終わらない時には翌日、再開するということもあった。見ている側も深い集中が必要とされるので（フロアーに立つ二人の動きを息をひそめて見入るので、自然に集中が深まるのだが…）実に疲れる。ひと組が終わるたびに「息を入れて」、止めて、吐いて」を全員で行う。いったんからだをゆるめて、次の組の出会いのレッスンに入る。出会いのレッスンの詳細は、『からだごとばのレッスン』<sup>(10)</sup> や『竹内レッスン』<sup>(11)</sup> を参照していただきたい。

ここでは、学生たちの実際の出会いの体験をあげる。まず、二人一組になるので、その組み合わせと順番を決める。そしていよいよ最初の組の開始。

EさんとFさんが四角い空間のむこうとこちらで背を向けて立っている。さあ、一回、息を入れてー止めてー吐いて。あとは各自、上体をぶら下げたり軽くジャンプするなどしてからだをゆるめ、もういちど息を吐いて、脱力と集中を深める。どうぞ、の合図で、振り向いたら、ここからは特別な空間世界に入っていくことになる。EさんもFさんも振り返って、ひと息おいてから歩き出した。互いが互いの視界に入ってきたようだ。このまままっすぐ歩いていけば、二人は正面から向き合うことになるのだが…、Eさんが少し前進したところで方向を変えてゆっくり歩き始めた。視線はFさんの方向にむけたまま。Fさんは少し驚いたようすで、戸惑っているう

ちに二人はすれ違う。Fさんは振り向いてEさんに近づいていく。Eさんはまた向きを変えてFさんから離れていく。Fさんは追いかけるように少し速足で歩み寄るが、そこで立ち止まる。EさんはFさんからさらに離れるところへ歩いていく。…さつきまでじつと動かなかったFさんが、気を取り直したようにEさんの目の前まで近づく。Eさんは一歩横にずれる。Fさんまた正面へ、Eさんまた一歩横にずれる。Fさん今度はEさんの斜め前へ、EさんはFさんと肩を並べるように真横に立つて視線を合わせない。Fさんはもう一度Eさんの斜め前へ、こんな息の詰まるような小さな動きを何度か繰り返し、正対とはいかないまでも向かい合う形で接近して立つ、しばらく静止。Eさんはまた離れようと思ったのか足を前に出そうと少し浮かしてみるのがやっぱりやめてもとに戻す。動かない。さあどうなるのか、ここでストップという声をかけて止めようかと思つた瞬間、Fさんの両手が静かに上がってきた。両掌を上に向けてEさんの方に差し出した。Eさんをまっすぐに見ている。さてEさんはどうするだろうか？と見ていると…、少しの間をおいてEさんの手がおおずおおずしながらゆっくりゆっくり上がってくる。Fさんと同じしぐさだ。掌を上している。視線は上がって、互いに相手をまっすぐに見ている。鏡に映っているように二人は同じポーズになっている。(わぁーなんで？さんねん。Eさん、Fさんが出した手の上に乗せればいいのに) …とは、見ていた人の感想。このまま終わってしまうのかと思つていたとき、はじめに手を差し出していたFさんが、自分の掌を返してEさんの掌に重ねた。見つめあつていた二人の表情がふぁーっ

と変わる。静止…。はい、そこまで、の合図で、一同大きなよめき。あーよかつた、二人が手をとりあえて。あるいは、息をつめてじつと見ていた、ふう、やっとここで深く呼吸できた、というどよめきだろうか。

このあと、EさんとFさんは、初めから終わりまで自分がどのように動いたか、どのように感じたか、をみんなの前で言葉にした。そのあと、見ていた人たちも感想や意見を述べる。上に括弧書きで書いたのは、この見ていた人の意見である。EさんとFさんの回想と感想についてここにあげることは割愛するが、Eさんの「ふりかえり」にはこうある。「相手に向き合うことが怖くて避けていた。相手は、何度も向き合おうとしてくれていたし、どうしたら私が怖がらずいられるかと試行錯誤してくれていることがすごく伝わってきて、うれしかった。わたしの気持ち動いた」。

この組み合わせのように、静かに小さな動きで展開していく、一同がほつとするような終わり方を迎えるものがある一方で、走り、逃げ、追いかける、または取っ組み合うというような展開になることもある。「出会い」に予定調和はない。何が起こるかわからない。

さて、二人がまっすぐに向きあい、一同も深い集中のなかに入るこの特別な時空間で、学生たちは何を体験しただろうか。次に示すのは、「出会いのレッスン」を行った学生の「ふりかえり」の記録の抜粋である。

・まだだれでもない「○○(名前)」、「素の「○○」になる

ことができた

- ・自分は、相手と視線を合わせることやむやみに近づくことを避けたいと思っていることに改めて気づいた
- ・普段の自分とのギャップを大きく感じながらも、本心で動いていることが気持ちよかった
- ・現実とは違う世界で、自分と他人が二人になった時、よい距離感を保ちたいとか、相手をすごく驚かせているのではないかという不安をもった
- ・この空間では、日常とは違う感情や行動が自然と生まれてきたように思う
- ・人ってすごい！！ 別世界で二人だけになると、初めは遠すぎる二人が、何かのきっかけで動き始め、言葉もないのに理解しあおうとしている！
- ・本当の自分と向き合わなければいけないくて、しかも、その自分を相手に見せなければいけない。だから時間もかかるとし、照れくさい
- ・友人が多い中で行った 知っている人同士だからこそ気をつかったりしてしまふけれど、そんなこと必要なのだと分かった
- ・近づいてこれると逃げたくなったり、拒否してしまうことがあったが、次第に安らぐ場所、側にいてくれる、触れられることがとても気持ち良いとも、有り難い、とも感じました

「出会い」、竹内は、人と人との関係の、ある特別な様態を「出会う」という言葉を用いて表した。人と人がまつす

ぐに「じか」に立ちあう、そのとき、そこでは予期せぬ何かが起こる。この「間身体」において、人は新しい自分に出会うことにもなる。覆い隠されていた自分が呼び覚まされたといってもよい。未知の自分に出会うことであるかもしれない。そのとき、そこにいた自分は相手に突破されて「からっぽ」になっている。そして、今までそこにいた自分とはまったく違う自分に書き換えられている。それが、人が人に出会うということである、と竹内は考えている。<sup>(12)</sup>

人が人に「出会う」ためには、余計なものを手放して、「じか」にこの世界に立つことが必要なのである。

まとめにかえて

本稿は、ポスト・グローバル化社会にむけた身体についての論考である。人間が人間として生き生きと生きるために身体には何ができるか、ということに焦点を当てた。その身体とは、もちろん生きものとしての人間の「からだ」である。そして、竹内敏晴の思想と実践を手がかりにしながら、学生たちとともにレッスンをを行い、彼女たちのふりかえりにある「じか」ということや「からだの不思議」への気づきを取りあげた。レッスンは、彼女たちのからだが行った「じか」であること「共にある」ことへの格闘のようでもあり、「ふりかえり」はその格闘の足跡だといってよいかもしれない。最後にもう一つ、その足跡をたどりたい。「呼びかけ」や「出会い」に至る四日間のさまざまな「からだ体験」の「ふりかえり」に残されたことばである。

「相手が身をゆだねてくれること」のうれしさ 相手との一

体感 相手にゆだねる心地よさ」「これまで、心で支えあうことは何度も学んできたが、からだで互いを支えあうことも とても大切なものだということに気がついた」  
 このような、からだがもつ力に、私は信をおく。

## 【参考文献】

- (1) 西谷修『理性の探求』岩波書店二〇〇九
- (2) 野口三千三『原初生命体としての人間』岩波書店二〇〇三（初版 三笠書房一九七二）
- (3) 林 竹二・竹内敏晴『からだ＝魂のドラマ―「生きる力」が目覚めるために―』藤原書店 二〇〇三
- (4) 竹内敏晴『「出会う」ということ』藤原書店 二〇〇九
- (5) 竹内敏晴『セレクトション・竹内敏晴「からだ」と思想』（全4巻）藤原書店 二〇一四である。第1巻 主体としての「からだ」、第2巻 「したくない」という自由、第3巻 「出会う」とことと「生きる」こと、第4巻 「じか」の思想。
- (6) 竹内敏晴 前掲書4 一六頁
- (7) 三井悦子「個と関係性について―「わたし」であること、つながること」（竹谷和之「バスク民族のスポーツ文化政策に関する総合的調査研究」平成一六〜一九年度文科省科研究費研究経過報告書所収二〇〇八、二一〜二七頁）
- (8) 竹内敏晴氏を囲む研究会 二一世紀スポーツ文化研究所の月例研究会において、三井が呼びかけ人となり企画、二〇〇五年七月から二〇〇七年一二月までの間に四回開催された。
- (9) からだのことを話そう 竹内敏晴氏を囲んで、IPHIGENIA 第6号 二〇〇五、一三八頁
- (10) 竹内敏晴『からだ』ことばのレッスン―自分に気づき、他者に出会う』講談社現代新書一九九〇
- (11) 竹内敏晴『竹内レッスン』春風社二〇〇六
- (12) 竹内敏晴 前掲書4

## **The potentiality of the human body's doings –Toward a new era of peace for human being–**

MII Etsuko

This paper is to consider about the potentiality of human body's doing. This thinking is based on the philosophy and practice by Takeuchi Toshiharu (1925-2009) who is Japanese director and interpreter. His work were focused on the existence of human being and on the relationship. He did various kinds of lesson, are with bodily act. Through his lesson, he showed important concept for existence and human-relation. Some of them are 'Jika' and 'Karada' in Japanese. In this text the reason of writing them in original language are explained.

Is Man a rational animal? We know, occasionally we do beyond/without the consciousness or the reason. On this time, our bodies move spontaneous before a person thinks, decides, and commands. In short the body IS as the subject. Man live on this body. Man is such a life. Human body's doings are wonderful and mysterious.

This view point helpful leads to find the guidepost in the deep forest of the post-globalized world.